メインシナリオ／サイド第５回
『炎の慟哭　第１話』個別リアクション

『生きていたい、大事な人と』

「散々悩んで考えてきたから聞いて」
　メリッサ・ガードナーは、説明会前に、館の門の前で待ち伏せをしてレイザ・インダーと接触を果たしていた。
「すごーく産みたいけど産んであげない」
「何かと思えば……」
　真剣な表情のメリッサの言葉に、レイザが苦笑する。
「無責任なこと言わないでよ、私が独りで育てたらアホな子になるよ！」
「アホな子にしたくなければ、一緒に育ててくれそうなヤツ落して結婚しろよ」
「……本気で言ってるの？」
「我が子を守り育てる為に、それくらいのことは出来る女だと思っていたが、違うのか」
　レイザはメリッサから顔を背けた。彼はかなり、不機嫌そうだった。
　メリッサは沈んでいく心を奮い立たせて、両手を伸ばしてレイザの顔を挟み、自分の方に向けた。
「生きるのは正直諦めてたかもしれない。ずっと好き勝手生きてきたから欲張らない、マテオ・テーペに登れたらもういい、ここから出るのは私じゃなくていいと思ってた」
　そんな時に、彼と出会った。
　マテオ・テーペに登ることだけを考えていた時に。
「けど今は違う」
　レイザの赤い瞳を真剣に、まっすぐ見つめながらメリッサは言う。
「生きていたいの……大事な人と」
　自分の子を産むか？　それとも皆が生きる世界をとりもどすために共に命を賭すか――その問いかけの答えは、どちらでもなかった。
「取り戻すのは一緒に笑える世界がいい。だから諦めないで欲張ることにした」
　切なげに眼を細めて、メリッサは彼の瞳に語りかける。
「ねぇ……レイザくんも欲張ってよ」
　彼もまた真剣な目でメリッサを見ていたが、何も言わない。
「そーゆーわけで」
　途端、メリッサは彼から手を話し、にっこり笑みを浮かべた。
「後押し、よ・ろ・し・く・ね」
　そして、指先でつんつんとレイザの肩をつついた。
　レイザは呆れ顔のような、何とも言えない顔になる。
「あー……ところでさ……」
　先ほどまでとはまた少し違う、心配げな顔をメリッサはレイザに向けた。
「結婚しないで子供とか、ヤり残しとか。ロクデナシって罵られるやつだよ？　ほかでは言わないほうがいいと思う」
「ヤりのこ……」」
　途端、軽くレイザは吹き出した。
「なんだそれは、俺の真面目な話を、どう捉えたんだお前の頭は」
　笑いながら、レイザはメリッサの頭の上に片手を置いた。
「髪、切ったんだな」
「う、うん。結婚断られたのがショックすぎて……」
　しょんぼりしてみせると、レイザの顔からも笑みが消えていく。
「うそ。ちょっと自分に気合いいれたくなっただけ」
　そう笑うと、つられるかのように彼の顔も穏やかになり、メリッサはほっとした。
「メリッサ」
　レイザは穏やかな表情のまま、こう言った。
「お前は火口に来なくていい」
「え？」
「お前には、お前のことを必要としている家族のような存在がいる。大事な人と『生きたい』と思っているお前を、連れていきたくはない」
　考えを変えさせたのはレイザだ。
　大事な人とは彼のことで、レイザと一緒に笑える世界を取り戻したい。
　あなたと生きたいと、そう素直に言えば、伝わるだろうか。
　それとも、より距離を置かれてしまうのだろうか……。
「どうして？　一緒に頑張ろうよ」
　穏やかな表情のまま、レイザは首を横に振り、話し始めた。
「俺の身体に、お前に探してもらっていた痣がある」
　双子の姉と共に、痣を持って生まれてきたのだと。
　発見した祖母がレイザの痣を隠してくれたため、誰にも知られることなく、レイザは生きてこれ

たということ。
「火山は火の魔力の吹き溜まりだ。魔力を正常な状態に戻す為に、痣のある肉体が必要なんだ」
　自分の役目は、この体を持っていき、マグマの中で溶かして力と融合させることにあるのだと、レイザはメリッサに語った。
「体は失うけれど、俺の精神はきっとなくならない。次に宿る命――痣を持つ赤子の中に宿るんだ。その時は、先に死んだ姉と一つになっていると思うし、新たな体は女の身体になっているだろう」
　くすりと笑って、レイザはメリッサの頬に手を添えて顔を近づけた。
「だから……試しておかなくていいのか？　この身体を」
　メリッサの身体が、ゾクリと震えた。
　と、その時。
　館から、レイザの名を呼ぶ声が響いてきた。
「気が向いたら、道中のサポートは頼む」
　そう言い、レイザは館へと戻っていった。
　メリッサはその場にへたり込んだ。
　彼の推薦が得られなくても、気持ちは変わらない、けれど……。

こちらのリアクションは以下のＰＣに発行されています。
メリッサ・ガードナー